

高木仁三郎市民科学基金 研修 完了報告書

提出日：2008年4月14日

1. 氏名・グループ名及び研究テーマ

氏名(グループ名)	秋山 晶子
連絡先・所属など	京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 indiakiko@gmail.com
調査研究・研修のテーマ	市民の食生活から市場主義型「有機農業」を再考する：インド・ヨーロッパ・日本における「食の安全性」
研修先の機関・名称など	Wayanad Social Society Service

2. 調査研究・研修結果の概要

南インドのケーララ州の東北部、ワヤナッド県では、州政府や農民自助グループ、NGOなどが協力し、有機農業の普及に努めている。その活動の中心的存在である NGO の Wayanad Social Service Society (WSSS) にて、研修に参加することとなった。農民との話し合いや農作業への参加を通して、熱帯湿潤地方特有の有機農業の技術とその普及の現状、さらには、食の安全性について理解を深めようというのが目的である。

標高 700 から 800 メートルという高地条件を生かし、ワヤナッド県では古くから胡椒を中心とするスパイス、コーヒーの産地である。2月、その胡椒とコーヒーの収穫期にあたり、農家では収穫作業とあわせて、乾季の土壌管理に忙しい。

1990 年代に農民により高揚した有機農業運動が、有機農業が当地に広がったそもそもの発端である。当時、深刻化した農薬による健康被害、インド政府による農業助成の削減は、多くの農民を苦しめ、ワヤナッド県は、州内で最も多くの農民の自殺者を出した。こういった状況を受けて、農民の自助努力と環境および食の安全性の回復を掲げて農民による有機農業運動が展開されたのである。その後、2000 年に入ると国際有機認証制度がインドに導入されると、運動は、有機認証を取得し国際有機市場へ進出する方向へと向かっていく。徐々に運動色が薄れる一方で、プレミアム価格を求めて有機農業に転換する農民が増加しはじめたのである。

これが大まかな背景だが、村人たちと交流を深める中で、徐々により複雑な状況が見えるようになってきた。一例をあげると、ある農民が有機認証制度に参加を希望しても、経済的、そして農業生態的な制約から参加を断念せざるをえないことがある。支援制度は利用可能だが、それでも 1 ヘクタールあたり数百ルピーの転換費用がかかってしまう。また、この地域では認証費用軽減のため、Internal Control System といわれるグループ認証制度を採用している。これは、栽培品目、農地条件が類似している 10 人程度の農民のグループに認証を与えるというものである。つまり、近隣の複数の農民が有機農業への転換に同意しないとグループを組むことはできない。さらに、水利設備を共有している農民が一人でも化学投入物を使用している場合は、認証制度の基準を満たさない。加えて、深刻な問題として、海外の取引先との契約が遅れており、一部の農民運動団体は胡椒のストックを抱え、農民への支払いも滞っている。

研修を通じて、54 件の農家を訪問し、農民、運動家、政府関係者などと意見を交わすことができた。有機農業運動の一時的な高揚が落ち着く中で、営農の安定と環境への配慮を同時に満たすために当該地の農業事情が揺れ動いていることを感じ、継続的な調査の必要性を感じる研修であった。

3. 調査研究・研修の経過

- ・2007年2月11日
ケーララ州ワヤナッド県マナンタヴァディ (Mananthavadi)、WSSS での研修開始
- ・2007年2月11日-2月14日
有機グループ認証プログラム、実施地訪問
- ・2007年2月15日-2月17日
有機農法講習「熱帯農業における土壌と作物の栄養管理」に参加
- ・2月18日-2月25日
農村訪問：有機農業、伝統農業、慣行農業の実践農家を訪問
- ・2月26日-3月6日
有機農業実習と農民への聞き取り調査
- ・3月6日-3月15日
コチにて、農作物流通関係の業者、香料局有機農業部門への訪問及び聞き取り調査
- ・3月19日
州都トリヴァンドラムより帰路

4. 調査研究・研修の成果

- ・熱帯湿潤地方の有機農業技術の理解
 - ：鉄分の多いラテライト土壌への土壌活性化肥料の技術
 - ：ココナッツ、胡椒、バナナに周期的に蔓延する病害虫の理解とその対策法
 - ：牛フン、生ゴミを利用したバイオガス技術とその管理方法
 - ：ミミズコンポストの作成方法
- ・南インド、ケーララ州の農村生態の理解
 - ：水利条件、灌漑設備のメカニズム
 - ：年間二度にわたるモンスーン状況と農業年間スケジュール
 - ：栽培作物の変動（ゴムを中心に換金作物の増加と稲作栽培離れ）
- ・農村の社会的背景の理解
 - ：ヒンドゥー教徒、キリスト教徒、イスラム教徒、「指定部族」の居住環境、社会ネットワーク事情
 - ：専業農家離れと日雇い農民の現状
 - ：行政の差別化撤廃政策の農業労働の影響
- ・現地における農業の現状と有機農業の広まりの関係
 - ：換金作物の価格の不安定化と政府による農業助成制度の削減
 - ：有機農業運動の高揚と有機認証制度の導入

5. 対外的な発表実績

- ・2006年11月 京都大学国際シンポジウムにてポスター発表（英語）
- ・2008年2月
- ・2008年3月 「南インド、ケーララ州における有機農業推進政策」『アジア・アフリカ地域研究』掲載
- ・2008年5月 日本文化人類学会にて発表（予定）

6. 今後の展望

研修後、より詳細な調査の必要性を感じ、同じワヤナッド県の農村にて2007年8月～12月、2008年3月～5月に本格的な調査を実施している。研修を行ったWSSSの紹介で、有機農民の家にホームステイし、農村における詳細な農業事情と有機農業の現状の理解につとめている。また、少しずつではあるが現地語であるマラヤーラム語を学び、可能な限り通訳を通さずに村人たちを交流し、研修中は理解できなかった農民の生活世界を学ばせてもらっている。

また、2007年7月には2週間、イギリスを訪問し、ワヤナッド県で生産されている胡椒がどのような経緯を辿って食卓まで届くのか追跡調査をした。具体的には、食品貿易会社、卸売会社、大手スーパーマーケット、オーガニックショップなどを訪れ、オーガニック食品の販売網、価格設定メカニズム、消費者の動向に関して聞き取り調査を実施した。

今後の予定であるが、2009年2月まではインドの農村における調査を継続し、現地の農業システムの理解と有機農業事情の理解を深めたい。合わせて、グローバルな農産物市場のメカニズムの中で、農村の農業はどのようにして成り立たせられるか、農民たちの食の安全はどのようにして守れるか、イギリスでの調査を補強しつつ、農村での研修、調査とつなぎ合わせて考えたい。

高木基金へのご意見

7. 完了報告 英文概要

Recipient Name	Akiko Akiyama
Belonging / Contact Address < 公表可能な問い合わせ先・メールアドレスなど >	Graduate School of Asian and African Area Studies, Kyoto University indiakiko@gmail.com
Theme of Research/Training	Reconsidering of market-driven Organic Agriculture: Food Safety in Europe, India and Japan
Name of the Organization Providing Training < 研修の該当者のみ >	Wayanad Social Service Society(WSSS)

Organic Farming has been widespread in Wayanad District, Kerala, South India, supported by the state government, farmers' self-reliance groups, and NGOs. The purpose of the training is to understand the organic farming method in tropical agricultural system, as well as the current situation of organic agriculture there.

Peppers and coffee are two main cash crops in Wayand, and February is the harvesting time of these crops. Also, Farmers are busy for soil management which is crucial in tropical areas during the dry season.

Briefly speaking, organic agriculture was introduced as a part of farmers' movement in 1990's. The overuse of chemical fertilizers and pesticides caused serious health disorders for villagers. Moreover, some 5000 farmers only in Wayanad committed suicide due to the accumulated debt led by the price disorder of crops and the diminution of subsidy by the central government of India. As a response of the devastated situation, the farmers' movement was raised with the slogan of self-reliance, environmental conservation and safety food. In the 2000's, the movement arrived at the second stage as the international organic farming certificate was introduced in India. Some farmers have converted to organic farming for the premium price on the cash crops, not necessarily for the environmental and health awareness.

In addition to the above background, I started to notice more complicated situation over the organic agriculture in the area, through communicating with farmers. For instance, there are economical and agro-biological hurdles to join the certificate program. Farmers have to pay some hundreds rupee per hectare to convert their farms although they can access certain financial support. Besides, the organic certificate program, called Internal Control System, is not for individual farmers but for a farmer's group whose members share similar crops and agro-biological condition. Therefore, if neighbor farmers do not agree with the conversion, the group can not be organized. In the case that even a single farmer use chemical inputs on the shared irrigation network, the certificate can not be provided. Moreover, some farmer's organization accumulated the stock of peppers without paying premium price for farmers, due to lack of connection with foreign organic market.

The training and field visit provided me the in-depth understanding of the contemporary organic farming situation in the area. Agricultural system which can fulfill both economical and environmental sustainability is an urgent assignment not only in India but also all over the world. The further and long term study should be employed as soon as possible.